

【エッセイ】

「虚構」社会を生きる「ルル」
—ヴェーデキントの『ルル』二部作を読んで—

宮西 郁実

『ルル』二部作において、主人公であるルルという女性をどのように捉えるか。19世紀末に主流であった「ルル」像は、典型的な「ファム・ファタル」であり、男性を誘惑し破滅に導く「悪女」であった。そして『ルル』がオペラ化された後には、「男性の作り出した虚構」としての「ルル」像が登場した。彼女の周囲の男性は、ルルに対して自分たちに都合のいい女性像を投影し、それぞれが好き勝手な名前を彼女に付ける。このように男性によってその人格を恣意的に認識されることによって、ルルのアイデンティティは一貫性に欠け、彼女は実体の無い女性のように映る。「ルル」という人物は、元々男性を破壊する性格を持つ妖婦なのではなく、男性が作り出した名前を持たない女性の「像」に過ぎず、登場人物の男性たちはその「像」と現実の「ルル」との間のギャップを受け容れられずに絶望することで自滅してしまう。この作品の受容史の中ではこのような「ルル」像は最近のものである¹。

これらの「ルル」像の変遷からも『ルル』の解釈の多様性が伺えるが、この虚構的な「ルル」のイメージとその男性を破壊するという役割を結び付けて考えると、この作品に登場する男性たちの虚構性も見えてくる。『地霊』に登場する男性たちは、ルルを神聖視している。彼らにとってルルは「水の精メルジーネ」(I, 104)であり、「かわいい小悪魔」(I, 106)でもある²。男性たちはルルに「身体的な完全性ならびに精神的な完全性」(I, 129)を感じ、彼女を「はるか上の高い天」(I, 148)にいる「神聖な存在」(I, 147)として扱い、自分たちと一線を画す。

しかし、そのような「ルル」像はもちろん虚構である。ゴル博士は「こんな白い肌には、これまでお目にかかったことがありませんな」とルルを褒めるが（I ,85）、その肌は「毎日香油でマッサージして、そのあとパウダーを振ってる」（I ,104）ために美しいのであり、ルル特有のものというわけではない。男性たちは、ルルと自身の夢見る女性像との間の食い違いから、彼らの理想的な女性像とはあくまで虚構でしかないと嫌でも気づかされる。シュヴァルツはルルを「上からおりてきた」女性と信じていたが、ルルは元々「裸足で客たちのあいだをかき分けて」「花を売っていた」のである（I ,110-111）。その事実をシェーンに知らされ、シュヴァルツの「ルル」像は崩壊した。彼らが信じていた「理想の女性」としての「ルル」は、実際には妄想の産物であった。その時、男性たちが「現実である」と信じていた他の全てのものもまた、本当に「現実」であるのだろうか、と彼らは疑う。そして自分たちの周りに、そして自分たち自身の内面にも同様の虚構が満ち満ちていると思い知らされたとき、彼らのアイデンティティは致命的な打撃を受ける。ルルは男性たちの描く様々な理想像を裏切ることによって、男性社会が築き上げた彼ら自身の虚構性を暴く危険性を持っている。

ルルは作中で何度も男性たちが彼女に抱くイメージを裏切っているの
で、ここからその具体例を見ていく。ゴル博士が彼女を「なおきれい」に見える視点についてシェーンに説明するときも、彼女はあっさり「わたしはどこから見たってきれい」なのだと言い、ゴル博士のこだわりを一蹴する（I ,85-86）。このようなやり方でルルは作中の男性たちが重んじることを悉く否定し、その虚構性を指摘する。この指摘は『地霊』の登場人物である「画家」のシュヴァルツや「新聞記者」のシェーンにはとりわけ攻撃的な指摘だった。

ルルと二番目に結婚するシュヴァルツは、二つの虚像を信じ込んでいる。一つは、ルルに投影している「エヴァ」という虚像、もう一つは「芸術家

である彼自身」である。一つ目については、彼がルルに「エヴァ」という名をつけたことや、二幕冒頭でのルルとの会話によって明らかである。

シュヴァルツ　きょうのきみは特別チャーミングだと思うよ。
ルルー　（鏡をちらっと見て）期待の程度によることだわ。
シュヴァルツ　髪は朝のさわやかさに息づいて……
ルルー　シャワーを浴びてきたからよ。
シュヴァルツ　（彼女に近よりながら）きょうはおそろしく仕事が多いんだよ。
ルルー　そう自分に言いきかせてるんでしょう。

(I ,98)

ここでルルは、シュヴァルツの自分に対する勘違いだけでなく、彼の仕事に対する態度にも否定的である。彼との結婚前に、シュヴァルツの名前を呼ばないことに対して、彼が「ごまかしてるな」と追究しようとした際に、ルルは「あなたがごまかしてるのよ」と返す(I ,93)。この場の冒頭でシュヴァルツはゴルによって自身の絵画に口出しされることを不満に思い、「そろそろ芸術家の誇りが頭をもたげる」と話した(I ,89)。ルルはシュヴァルツを「俗物」で「無教養」判断しているが、おそらくこの時点で彼の自身に対する態度からそのように判断していたのではないか。ルルがシュヴァルツは自身が「芸術家」で「有名人」だと「思い込んでる」のだという考えをシェーンに話したとき、シェーンは「それが肝心なことだ」と言い、それは「わたしたちの働き」の成果だと答えたこと(I ,106-107) から、ルルの指摘はおそらく間違いではなかったであろう。シュヴァルツのルルに対する勘違いの態度は、そのまま彼自身の「俗物」的な性格を暴き、彼の「芸術家」という側面を揺らがせてしまった。シュヴァルツは自らの知らないルルの一面をシェーンに教えられることで、ルルに抱いていた虚構のイメージが崩壊し、そのことに対する失望から自殺してしまうが、彼に

としては「エヴァ」である「ルル」像の崩壊は同様に「芸術家であるシュヴァルツ」という虚像の崩壊でもあった。彼はルルに自らに都合のいい女性像を投影したが、その一方で新聞記者であるシェーンのはからいによって名声を得た彼もシェーンによって自分自身を虚飾された人間だったのである。

シュヴァルツの死後、ルルはアルヴァの舞台に出演している。この時に登場するエスツェルニー公爵についても、ルルはほとんど相手にしない。公爵がルルを「教養ある人間の中で、あなたに対して理性を失わないような者は、ひとりも見あたらない」だろうと話しても、ルルは「あなたの願いはだれひとり、あなたを欺くことなしには満たしてさしあげられませんわ」と突き放す（I, 128）。ここでもルルはシュヴァルツのときのように、公爵の欺瞞について指摘する。公爵はルルが「ひとりの男性を足もとに縛り付けるだけの尊厳と品格を感じて」と推測する（I, 127）。しかし、後にルルがシェーンに対して自身が「これっぽちでも自尊心を持ったことがある」とは「思いもよらない」と話していることから（I, 132）、明らかに公爵の考える「ルル」は、ルルに対する認識として誤っている。公爵が自身の抱く、歪曲された「ルル」像を披露すればするほど、ルルは公爵が語る「貴族性」や「教養」の虚しさをますます感じる。こうして、「ルル」はそこに存在するだけで、再び男性の「虚構性」を暴くのである。

これまでゴル・シュヴァルツ・エスツェルニーの「虚構性」という点を指摘してきたが、とりわけ彼らに「虚構性」を与え、それを生業とするのがシェーン博士である。シェーンは、市民社会を様々に演出する。ゴルの結婚、シュヴァルツの名声、ルルの舞台の風評などは、すべてシェーンの働きかけによるものである。彼は自らの人生も同様に演出する。令嬢との結婚を以って、ルルと決別するための儀式とし、婚約者に対しては「躰」という言葉を使う。シュヴァルツが自殺したときも、彼にとっての問題は道徳的な罪悪感などではなく「スキャンダル」である。ルルとアルヴァは

彼の信条を次のように考える。

ルル 彼がわたしの成功を信じるようになってほしいわ！ お
 よそ芸術を信じていないのよ。新聞だけを信じて。
アルヴァ なにひとつ信じちゃいませんよ。

(I ,123)

一見、新聞を信じているように見えるシェーンは、実は新聞すら信じていない。新聞の及ぼす影響力を知ってはいるが、その中には多くの思惑や嘘が含まれていることを、記者の側である彼は知っている。しかし、その影響力をよく理解する彼は、その力を操る一方で、常に自身に纏わりつく影響力を意識せずに生きることは出来ない。男性の作り出した虚像であるルルは、シェーンのアイデンティティに深く根ざした「虚構性」を徹底的に指摘することで、シェーンという人間そのものを否定してしまう。ルルはシェーンの「虚構性」を重視する人生を嗤う。シュヴァルツに求愛されて、ルルが逃げる第一幕第四場では、ルルはシェーンの婚約者の半身像に穴を開け、そこに足を通して言う。「この女のおかげで、彼は新しい人間になりました！」(I , 92) シェーンは令嬢と結婚することで、ルルとの「遊戯」を終わらせようとするが、ルルの目にはそのようなシェーンの態度は単なる表面的な取り繕いとしか映らない。それ故に、二人きりのときでもシェーンがルルを「きみ」ではなく「あなた」と呼ぶ「わけがわからない」のである (I , 105)。ルルは何度もシェーンの声明を表面的で形式的な「虚構」であると指摘する。シェーンがルルとは「(ルルの) 夫が同席しないかぎりには」「どんな場所でも会わない」と話しても、ルルは「あなた自身が自分の言ってることを信じてない」と答え、「結婚が間近に迫ったんだからそろそろ軽蔑をぶちまけてもいいなど思ってるんだったら、あなたは自分を欺いてる」と言う (I ,106)。シェーンにとって「初心な」令嬢との結婚は、「汚れのない家庭」を作り、自身を「品行方正な模範人間、

意志堅固な道徳居士」(I,135)というフィクションを成立させるための重要なイベントである。しかし、ルルは彼を殺してしまう直前に指摘する。「それまで自分のごく親しい友だちを、わたしによって欺いていたくせに、こんどは自分をわたしによって欺くことは、うまくできなかったのよ。」(I,150) 体裁を重んじ、自身すら演出しようと躍起になるシェーンに対し、ルルは「わたしは金輪際わたし以上の者でありたくはない」(I,132)と自らの生き方を引き合いに出す。シェーンは半年かけて成功するように苦心した舞台をルルが途中で放棄したことを嘆くが、そのシェーンに対してルルは「皮肉っぽく」彼が「自分の高尚な影響力を買いかぶっていた」のだと啜う(I,133)。ルルはシェーンに向かって婚約者と結婚し「人生」に対する「ほかのだれよりも大きな注文」(I,134)を満たせばいいのだと突き放す。ルルによって自らの人生で重んじてきた「虚構性」を徹底的に責められたシェーンは、「いっそこの世界の外に出られたら！」(I,135)と「虚構」の世界からの脱出を望むが、今更シェーンにはそのような生き方は出来ない。シェーンは婚約破棄という「虚構」の世界を生きる彼にとっての「死刑」を「執行」される。彼は常に人々を演出する側の人間であり、市民社会の「虚構性」の仕組みをよく理解していたが、彼がその仕組みを熟知しているが故に、自分ではその「虚構性」を享受することが出来なかったのである。

婚約破棄の後、シェーンは彼の醜さをよく知るルルと結婚する。シェーンはこの結婚によって、彼の価値観とは実は「虚構」に振り回された結果出来上がったものであり、「虚構」を熟知しうまく扱っているシェーンという男性」は、それこそ「虚構」のものだと思い知らされた。そして、シェーンにとってはっきりしていたはずの「虚構」と「現実」の境界は崩壊する。死の直前、シェーンは「断末魔の天使」、「だにのような悪運」「不治の病」(I,149-150)と形容してルルを罵る。シェーンはルルを拒絶する際に、とうとう彼女を「人間ではない何か」として扱う。作中の他の男性たちに比べれば、ルルの「虚構性」をよく理解し、利用していたはずの

シェーンにさえ、ルルが男を殺す怪物に見えるようになった。その最期になって、シェーンがルルを「人間ではない何か」として罵るようになったのは、これまで保ってきた彼の中の「虚構」と「現実」の境界が崩壊し、二つが「互いに入り組んでしまって、半人分は相手と一緒に歩き回っている」(I,151) 状態となってしまったためである。特にルルに妻を殺されたシェーンには、ゴルやシュヴァルツの死によってルルに付加された「ルルが平気で次々と人殺しをする女である」という「虚構」は非常に「現実」的に思えたであろう。結局、その矮小さを暴かれたシェーンも「市民社会の一番けちなコードである妻の姦通を阻止しようとして」³ 死んでしまう。

ルルと兄弟のように育ったと自負するアルヴァは、作家という職業である。これは他の登場人物とは異なった趣の職業である。シュヴァルツも画家であったが、前述のように、その「芸術家」としての側面は否定されているため、アルヴァはこれまで述べた男性たちの中で唯一特殊な立場だといえる。父親のシェーンは現実を演出し脚色する立場の人間であったが、アルヴァには演出家としての能力はない。彼は彩られた現実を享受し、台本として書き起こす立場の人間である。彼にとってはルルの人生は「おもしろい台本」のテーマでしかない (I,124)。同様に、彼自身の労働・家族・財産を取り巻く出来事も彼はまるで物語のように受け止める。第四幕第八場ではアルヴァのルルに対する信仰告白の場面であるが、この信仰告白はルルがアルヴァに対して放つ「わたしはあなたのお母さんに毒を盛ったわ」という台詞で終わる (I,146-148)。しかしこの台詞を聞いてもアルヴァは「身動きせずにひざまずいたまま」(I,148) であり、ルルを責めようとはしない。ルルのこの告白の直前に、アルヴァは自分を「卑劣きわる悪党」であり「名誉も誇りも感じない」と評すが (I,148)、この時のアルヴァはルルに対する信仰心と社会的道徳の間で苦悩している。彼がルルに出会った頃には「二年來寝たきり」だった母親の話が出てきた第三幕第一場でアルヴァは「人間関係をはっきり見ぬいたときのこと」を「長いあ

いだ思い出すのも恐ろしかった」という（Ⅰ,122）。この台詞は、ルルの正体をシェーンによって暴かれたシュヴァルツの姿を髣髴とさせる。すなわち、彼が「自分の内面のすべてが崩れおちるのを平然と見て」いた瞬間（Ⅰ,146）とは、まさにルルが自分の母親を殺したということに気づいた瞬間である。しかし、アルヴァとシュヴァルツの違いは、シュヴァルツが自分の理想とは違うルルの姿に絶望したのに対し、アルヴァにとって自分の母親を殺したルルは、その殺人によってますます「神聖な存在」となったということである。アルヴァは、愛のために殺人まで犯すルルに「母に対してよりも」、「高い尊敬を抱いていた」（Ⅰ,123）。同様に父親殺しの罪で投獄されたルルが脱獄した後も、彼女が「あたしはあなたのお父さんを殺した女よ！」と話すのに対し、アルヴァは「だからといって君への愛が薄れるわけじゃない」と答える（Ⅱ,186）。アルヴァは現実世界の両親よりも、台本のモデルに相応しい虚構の「ルル」を追い求める。ルルの犯した殺人さえ、アルヴァにとっては「ルル」という虚像を彩る要素の一つでしかない。アルヴァの人生の興味は、常に現実味に欠けた虚構にばかり向けられている。彼はジャックに殺される最後までルルを慕い続けるが、それは彼にとって台本のモデルにしかならないような現実と、虚像であるルルの間に差異を見出すことが出来なかったからである。

『パンドラの箱』においてのルルは、男を惹きつけ破滅させる力が無くなったように見られる。しかし、ルル自身の容姿や力が衰えたというよりも、相手にする男性たちのタイプが変化したということが問題なのではないだろうか。『地霊』に登場する男性たちは、新聞や芸術のように、「物質」そのものではなくその付加価値を取り扱う職種の間人であった。しかし、カスティ・ピアニ公爵やロドリゴ、殺人鬼ジャックらは、「人間の身体」に密接して生活している人々である。

『パンドラの箱』の中で最初にルルを拒絶したのは、力業師であるロドリゴであるが、冒頭で彼がこぼすのは衣裳や酒のこと、彼の経済状態の

話である。ロドリゴにとって価値のある重要なものは自分の目で見ることができ、手で触れられるようなものである。彼は「この国の国民ってやつは、もうすっかり落ちぶれているので、俺の立派な力業を尊敬することさえ知らないんだ」と愚痴る（Ⅱ,208）。新聞が力を持ち、株取引が盛んになっているような社会は彼にとって「落ちぶれている」社会である。これは『地霊』でルルに破滅させられた男たちとは全く反対の価値観といえる。自らに「虚構」の付加価値をつけないロドリゴに、ルルが及ぼせる影響はほとんどない。彼もシェーンのように結婚をする予定であった。彼が結婚の際に婚約者に「商券で二万、銀行に預けてあると申し上げておいた」とロドリゴが話すのを聞いて、ルルはその結婚に対してシェーンの時のようにその「虚構性」を指摘しようと、「楽しそうに」揶揄する。しかし、彼は婚約者が自身を「ハートを持った人間として尊敬してくれている」のが重要だとして取り合わない（Ⅱ,208）。彼は結婚に対してシェーンのように「大きな注文」を付けたりはしない。またカスティ・ピアニ公爵はロドリゴのように自らの身体を商売道具にしているわけではないが、「就職斡旋のエージェント」、「女術」（Ⅱ,196,200）をする人間である。そして、その仕事に「ある種の道徳的な満足さえ覚える」（Ⅱ,201）ような価値観を持つ人間であり、逮捕歴もある。また、彼は「株なんてやつは扱ったことがない」（Ⅱ,199）。常に金銭のやり取りは現金である。これらの点では、彼もロドリゴのようにシェーンたちとは反対の生き方をしている。『パンドラの箱』の主要人物である彼らはこれまでルルが凋落させてきた人間とは全く逆の価値観を持つ人々である。シェーンの死後に「ユングフラウ・ロープウェー株」が暴落したことは、新聞や株式が力を持つような「虚構」社会の演出家がいなくなり、ルルの「虚構性を指摘する」というやり方が通用しなくなったということの象徴のように思える。もはやルルの言葉によって致命的なアイデンティティの崩壊に陥るような男性は社会からいなくなったのである。そしてルルは殺人鬼であるジャックに殺されてしまうが、ジャックはルルが客の衣服から金を盗もうとしているこ

と、ゲシュヴィッツが妹だとルルが嘘をついていることを見抜く。この点において、ジャックの存在はルルが男性の「虚構」を見抜いてきたことに対する逆襲者であると捉えることもできる。

結局、「ルル」という女性をどのように見ればいいのか。彼女は社会の「虚構性」に密接に結びついた男性を破壊する。男性たちがルルに対して抱く出鱈目な「虚構」から、ルルはその男性たちが「結婚」や「芸術」に後から付加していく価値の「虚構性」も見抜き、馬鹿にする。彼女は自分自身の身体が演出されていることを知っている。化粧や衣裳替えという演出を普段から行っている彼女には、男性たちが演出された「ルル」像を信じている、または信じようとしている様子を嗤う。しかし、『パンドラの箱』の、「虚構性」とは別のものに価値観を置く男性たちは、ルル自身の「虚構性」を、信じ、崇拜する対象ではなく、単なる商品として扱うために、まるで『地霊』に対して『パンドラの箱』のルルは神通力を失ったように見えるのである。ルル本人はシェーンに与えられた「虚構性」を身に纏い、その恩恵を受けながらも、男性たちがその「虚構性」を重んじる様子が滑稽で不思議に見える。「はだしで」「花を売って歩く境涯」(Ⅱ,178)であり、市民社会の外部にいたルルが、市民社会の内部に招き入れられることで、彼女は市民社会の構造を無邪気に破壊する女性となったのである。

以上、「ルル」という女性の「ファミ・ファタル」的イメージと、その作り上げられた「虚構性」という、『ルル』受容史の中で提唱されてきた二つの「ルル」像を踏まえて、『ルル』という作品を考察した。「ルル」が男性によって作り上げられた虚像であり、彼女自身にはどのような怪物性も無いのであれば、何故彼女は男性にとって破壊的な存在になりえたのか。『地霊』においては「ルル」のイメージはひとりでの膨張し、ある男性たちにとっての脅威となってしまった。その一方で、『パンドラの箱』において彼女は没落の道を辿る。このような『地霊』と『パンドラの箱』との

間のルルの描かれ方の違いが、「ルル」という女性を受容するにあたって重要なポイントである。ルル自身が変わったのではなく、ルルの生きる社会が変わったという点に着目すれば、「ルル」という女性をどのように捉えるのか、という疑問に対する新しい答えが生まれるのではないだろうか。

(このエッセイは 2008 年度後期に開講された表現文化演習 3(担当:野末)の課題レポートを改稿したものである。)

【注】

- 1 『ルル』受容の変遷は吉田眸「客体としての女性ーヴェーデキント：ルルー」
101 - 104 頁を参照。
京都産業大学論集第 11 巻第 1 号に掲載 昭和 59 年 10 月
- 2 本文中の引用は以下に依る
I …フランク・ヴェーデキント『地霊』内垣啓一訳
『近代の反自然主義』(東京白水社 1970) に収録
II …フランク・ヴェーデキント『パンドラの箱』岩淵達治訳
岩波文庫 1984
- 3 『地霊・パンドラの箱』中の岩淵達治の「解説」参照 p 304